

浦賀文化

国民的歌人・ 若山牧水と浦賀

大正から昭和初期に活躍し、「旅と酒を愛した歌人」の異名をとる若山牧水。妻の病氣快癒を願い、温暖な気候と清浄な空気を求めて北下浦村（現在の横須賀市長沢）に居を定め、短歌や紀行文を残している。

「とにかく浦賀はいま私にとつての首府である。」と、歌人・若山牧水の心境を綴ったエッセイ『浦賀港』。妻の転地療養を目的にして横須賀の長沢に住み、郵便局での用足しや生活物資の調達のため浦賀までやってきた牧水。彼の眼に写った大正初期の浦賀をご紹介します。

◇ ◇ ◇



大正 5 年頃の若山牧水

海越えて鋸山はかすめども

此処の長浜浪立ちやまず

牧水の住んだ北下浦から眺めた房総半島の情景と、海岸に打ち寄せる波の様子を描いた作品です。その名の通り、鋭角的な稜線を見せてどつしりと屹立する対岸の山。一方、牧水のいる北下浦の海岸には、白い波頭が

幾重にも打ち寄せている。浦賀水道を介する二つの半島の眺めを象徴的に捉えた作品といえます。また、北下浦に住んでいたころ、たびたび訪れていた浦賀の印象はどのようなものだったのでしょうか。

若山牧水の本名は若山繁です。牧水というペンネームは、最も敬愛する母「マキ」の名と、水の美しい故郷をイメージして作られたといえます。明治十八年（一八八五年）、宮崎県東臼杵郡（現在は日向市）に生まれた牧水は、中学生のころから文芸誌に短歌や随筆を投稿していました。延岡中学を経て上京し、早稲田の英文科に学びます。半年ほどの新聞記者の生活になじめなかつた牧水は、東京に居を構えて作家生活に入ります。

大正四年（一九一五年）、東京に住んでいた牧水は、妻喜志子の病氣療養のために当時の三浦郡北下浦村長沢（現在の横須賀市長沢）に転居してきました。二年足らずの横須賀生活でしたが、この間、妻の病氣も快復す

るとともに、長女みさきも誕生しました。三浦半島の美しく豊かな自然環境に親しむ中で、日常の暮らしぶりをエッセイや短歌に残してきました。

◇ ◇ ◇

大正時代の初めごろの浦賀の様子を描いたエッセイ『浦賀港』により、牧水の浦賀に対する印象をたどってみましょう。

「浦賀といえは直ぐ黒船を連想する。七八年も前になった、房州に渡る途中、甲板の上から私は初めてその黒船の港を見たのである。意外にもそこは山奥の静にでもありそうな錆と静寂とを持った古い小さい港であった。蹄鉄形に双方からさし出た木深い小山の間に、狭いながらも極く深い潮がとろとろに湛えられて、古めかしい町屋が矢張り蹄鉄形にその山の麓にぎっしりと固まっていた。一つの小山が海に落ちる端の所は高い崖となつて、その頂上には松が老いて茂り、深い木の間には寂びた石の鳥居が見えていた。早咲きの梅もとびとびに見え、町から空には小さな鷗が幾つもまっていた。」

この部分から考えると、牧水は、浦賀イコール黒船の来航した所というイメージを持っていたようです。しかし、当時の北下浦には商店が少なく、浦賀に

行けば必要な物資が揃う「都会」でした。

「初めて浦賀の町に足を入れたのは当地移住後十日か二十日の頃であった。春日煦々というに打って着けた麗らかな日で、明日か明後日かと桜の咲くのが待たれていた。港の西岸に在る愛宕山というは桜の名所で可なり古木が数百本植わって居る。町も従って浮き立って、行き交う女など極めて美しく私の眼に映った。これはこれほど意外の賑いに私は心をときめかした。（略）」

とにかく浦賀はいま私にとつての首府である。浦賀に行く、ということはいへんなことである。尻ひっからげて一里半、帰りには持てるだけのものを擔いでくる。乾物、牛肉、玩具、菓子。或る時、ウイスキーを一本買ったはいが、ちゃぼんちゃぼんという風呂敷がぐれの音に忍び兼ね、途中の峠でとうとうあけてしまい、他の荷物まで振り落として帰ったこともあった。」

（芳賀久雄）

★参考文献

- ・文学に現れた横須賀 横須賀市教育委員会
- ・三浦半島文学めぐり
- ・中里行雄編 三浦文化研究会
- ・新横須賀人物往来 横須賀市生涯学習財団

歴史 語りい座・浦賀 四十七

郷土史家

山本 詔一



●『近世浦賀畸人伝』 XI ●



— 松下桑壺 —

松下桑壺は幼名を国五郎といい、屋号を江戸屋といった。主人となって吉兵衛と改めた。

「畸人伝」の中で、桑壺・吉兵衛は、多くの千石船を使って仙台藩や南部藩の米穀運送をおこなう廻船問屋であったと紹介されているが、江戸屋は干鰯問屋でもあった。吉兵衛が干鰯問屋の主人であったことは『浦賀中興雑記』の鈴木亀二氏の論考で知った。東浦賀の干鰯問屋は、必然的に浦賀奉行所の船改めを行う廻船問屋も兼務することになっていたので、東浦賀村の名主や年寄役を歴任した石井三郎兵衛家が残した古文書の中に東浦賀の廻船問屋行司をしていたときの桑壺・松下吉兵衛の名がみえる。

桑壺の時代ではないが、江戸屋が南部藩の穀宿をしていることがわかっている。穀宿とは、南部・盛岡藩から回漕されてくるお米をはじめ、御用荷物の荷揚げ、管理、江戸への搬送などを担当し、さらにお米を売却する際にその差配をする問屋である。

同様に、仙台藩にも御用達をして

いたと思われる、桑壺の時代からこのような商売をしていたとなると、五十年以上も仙台・南部藩との取引があったと考えられる。

こうした大きな商売をした余暇には、茶事や蹴鞠をして遊び、さらには読書が好きで、書もよくした。俳諧は師につくことはなく、先輩諸氏のを好んで詠んでいただけであった。しかしながら、耳を驚かすようなすばらしい句が少なくない。その中から一、二を拾い取ってみると

わか竹や机に影のささばさつ

蝙蝠や大門くぐる二日月

と奇人伝で紹介されている。

中年と記されているので、確かなことはわからないが、桑壺は延享二年（一七四五年）の生まれであるので、寛政期（一七八九年〜一八〇〇年）には、二十代になった跡継ぎに店を任せたとと思われる。その後、名も九兵衛と改めて、江戸に遊び、遠くは松前にまで足を延ばし数年を過ごしている。ここでアイヌ人と交流を持つようになり、アイヌ語にも通じるようになる。彼らを自分の手足のように自在に使うことができるようになった。その優秀な見識と度量は他人の及ぶところではなかった。そして未開の北海道の原野を歩き回り、

どのような困難辛苦にあったのかを山かけてからから葛の命かな

という句に残している。

しばらくして江戸へ帰り、また故郷の浦賀にも帰ってきたが、決して世間の細かな事柄に関わりをもたず、老後の楽しみに和漢の歴史書を書き写して過ごした。その蔵書の多さは棟木に届くほどであった。やがて病に伏すようになると、この筆写は臨終が近づくまで行われ、手から筆を離すことはなかった。この姿勢は隠居してからの志をかたく守ろうとする強い意志の表れであり、賞賛すべき姿勢である。

こうして、文政七年（一八二四年）六月、八十歳でその生涯を閉じた。

俳句の散歩道

こま犬の眼をのがれたる梅雨すずめ

小倉正樹

野分してひたに濡れたる引揚碑

武部 昭

笑話一題

私は浦賀に住み、二十二年になりました。その中で、出会った浦賀の美味しいものを紹介したいと思っています。まず、東叶神社すぐ近くの「わんこばん」は女性オーナーが一人でつくるパンでハード系のパンが美味しく噛みしめるたびに小麦の味が口いっぱい広がりに味わい深いパンが沢山あります。イトインスパースもあるのですが、コーチャのヨット越しの浦賀の海を見ながら食べるのも格別です。

東が「わんこばん」ですと、西は大衆本塚からほど近い浦賀の人なら大人から子どもまで知らない人はいない「浜田分店」です。ここは皆さんソフトフランスをあげる方も多のですが、私は断然ピーナッツコロネです。ソフトフランスに挟まれたピーナッツクリームとはまた違いコロネの中に入ったピーナッツはペーストの中にピーナッツの細かい粒が入った風味豊かな味わいです。もちろんソフトフランスパンもおすすめてです。

浦賀には、まだまだ紹介したい美味しいお店が沢山あります。是非一度、歴史散策の途中に立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

K*U

—浦賀コミセン分館よりお知らせ—

ノルディック de
うら散歩
～ペリーが見た浦賀～

日時：11/4・11（金）10:00～12:00
場所：浦賀コミセン分館ほか
締切：10/15（土）必着

【4日】ペリー来航時の浦賀の様子を座学で学びます。

【11日】ノルディックウォーキングの入門講座を受講し、ペリー公園まで歩きます。

詳細は、広報よこすか9月号・各コミセンに配架してあるチラシ等でご確認ください。

